



### (1) 京都大学の教育

#### ○大学院教育支援機構

優秀で意欲のある学生の修士課程、博士後期課程への進学を促進するため、2021年に設置。大学院生に対する経済支援を拡充するとともに、博士人材が幅広く活躍するためのキャリアパスの多様化を図る。その上で、留学生のリクルーティングや国際教育（海外短期留学、海外インターンシップなど）の支援を通じて、多様な人材を獲得・育成するとともに、その才能を世界に還元する「頭脳循環」の加速を目指している。21年度から開始した生活費相当額の経済支援により、24年度は約800人の博士課程学生を支援。23年4月には、アントレプレナーや教育力向上などを目指すコースがスタートした。

### (2) 京都大学の研究

#### ○次世代医療・iPS細胞治療研究センター (Ki-CONNECT)

iPS細胞をはじめとする新しい医療技術や附属病院が誇る統合医療データを医療・創薬の早期実用化につなげるため、2020年4月に京都大学医学部附属病院に設置。難病や希少疾患における早期臨床試験のための専用病棟として、臨床試験を推進するとともに、臨床情報にリンクしたクリニカルバイオバンクの拡大と応用に取り組んでいる。

#### ○がん免疫総合研究センター (CCII)

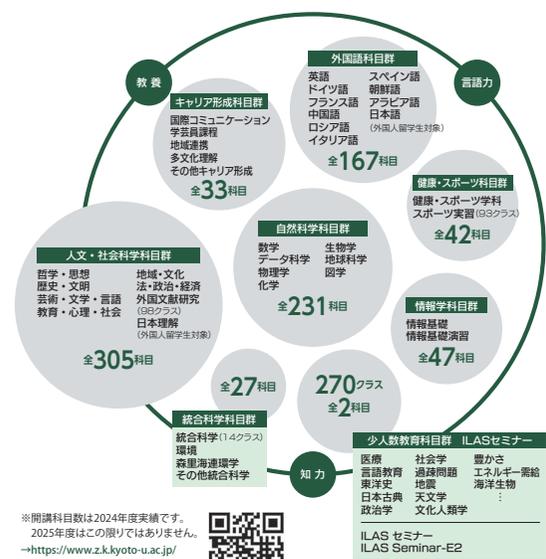
2020年4月、京都大学大学院医学研究科附属教育研究施設として設置。初代センター長はノーベル生理学・医学賞受賞者の本庶佑高等研究科特別教授が就任。日本初のがん免疫研究の拠点として、次世代のがん免疫研究者の育成と国際的研究ネットワーク形成を目指し、基礎から臨床応用まで一貫した研究体制により、わが国の革新的医療開発の先導的役割を担っていくことが期待されている。

### (3) 京都大学の産学連携活動

#### ○京都大学成長戦略本部

2024年4月、研究力強化のために財政基盤を確立させ、自律的な大学組織への構造改革を進める「成長戦略本部」を設置。同本部は、これまでの、産官学連携本部、オープンイノベーション機構、渉外部基金室、医学領域産学連携推進機構などを統合した。研究成果の事業化やスタートアップ支援などを通じて新たな価値を創出するとともに、本学と社会とのコミュニケーションを深め、寄付などの資金の獲得活動を強化する。また、これらの資金を大学に還元し、さらに自由で自律した研究活動の展開へとつなげ、大学の持続的成長を実現していく。

## 全学共通科目



通教育です。どの学部に入學した場合も、学部ごとに実施する専門教育を履修する前、もしくは専門教育と並行しながら「全学共通科目」を学びます。8つの科目群で開講数は約3000クラスにも及びます。

「重点の一つは、個々の学問領域を超えた幅広い分野の知見を広げるカリキュラム編成です。もう一つは、5〜25人程度のインタラクティブな少人数教育です。自然科学から人文学、社会科学、グローバルな課題まで、生きた現場で教育研究に携わる



みなとながひろ  
**湊長博総長**  
 1975年京都大学医学部卒業。同大学結核胸部疾患研究所附属病院医員、米国アルバートアインシュタイン医科大学微生物免疫学教室客員研究員、自治医科大学助教授、京都大学医学部教授、同大学大学院医学研究科長・医学部長、同大学理事・副学長などを経て2020年より現職。

1897(明治30)年、日本で二校目の帝国大学として創立された京都大学。アジア諸国で最多のノーベル賞受賞者を輩出するなど、「地球社会の調和ある共存に貢献すること」を基本理念に今日まで歩んできた姿勢は、わが国を代表する研究型大学としての125年を超える軌跡に表れています。

それら独創的な研究の業績は、「自由の学風」のもと生み出されたものにほかなりません。教育では伝統的に「対話を根幹とした自学自習」を柱に据え、学生の知的好奇心や探求心を育てています。

「京都大学では周りの多様な人々との交流を深めながら、味わったことのない喜びをたくさん経験してほしい」と語る湊総長。多様で有為の人材が世界中から集うことのできる魅力ある教育<sup>(1)</sup>・研究<sup>(2)</sup>環境の整備と、自律的な運営基盤を強化するための産学連携活動や基金活動<sup>(3)</sup>、社会への発信などに注力し、地球社会に貢献する京都大学の力強い歩みを着実に未来につないでいます。

# 京都大学

〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 教育推進・学生支援部 入試企画課 TEL 075-753-2521 https://www.kyoto-u.ac.jp/

# 「対話」を根幹とした「自学自習」を礎に 世界から集う多様な若者が切磋琢磨し 独創性あふれる研究で地球社会に貢献

「自由の学風」が生み出す  
 独創的研究で地球社会に貢献  
 ノーベル賞受賞者はアジア最多

京都大学は1897(明治30)年に日本で二校目の帝国大学として設立されました。その背景には、政治の中心から離れた京都の地に自由で新鮮な、そして本当に真理を探究し学問を研究する学府としての大学を作るといった構想があったと言われています。京都帝国大学の創設に携わった初代総長の木下廣次は、創立後最初の入学宣誓式で「自重自敬」について述べ、学生の自主性を尊重しました。この言葉を礎に125年を超える伝統の中で築かれてきたのが、京都大学を象徴する「自由の学風」なのです。

その自由の学風のもと、創造的研究を尊び、地球社会の調和ある共存に貢献することを基本理念としてきた歩みは、京都大学ゆかりのノーベル賞受賞者の軌跡に表れています。革新的な素粒子論を唱え、日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士(1949年、物理学

賞)をはじめとする11人の受賞者数は、アジアの大学の中で最多を誇ります。また「数学界のノーベル賞」とも呼ばれるフィールズ賞の日本人受賞者3人のうち、廣中平祐博士ら2人が京都大学を母校としています。2018年には、

体の中で免疫の働きのブレーキをかけている物質を発見し、がんの免疫療法や治療薬の開発などに貢献した功績により、本庶佑・京都大学高等研究院特別教授がノーベル生理学・医学賞を受賞しました。その本庶博士と研究をともにしてきたのが、湊長博総長その人でもあります。「自由の学風」が世界のトップと渡り合う高い研究力を一貫して培ってきた背景について、湊総長はこう話します。

「自由の学風とは、言い換えれば独創的であるということです。京都大学の科学の伝統は、自然科学である人文社会科学であれ、時代のトレンドを追うのではなく、未知の領域に果敢に挑戦することだと思えます。これは0から1を生むことであり、湯川秀樹先生はしばしば「飛躍する」と表現されています。多くの国際賞の中でも、ノーベル賞の特徴は



## 京都大学への入門授業 「ILASセミナー」で 自ら学問することを学び

こうした独創性の根源である知的好奇心と探求心を大切にできた京都大学では、「研究を通して教育する」を伝統的なモットーに掲げ、それを体現する「対話を根幹とした自学自習」を教育の柱に据えてきました。その知的空間にあふれる学問の魅力に触れる第一歩となるのが、各学部の枠を超えて、教養科目や外国語、専門基礎科目といった学上課程に共通する科目の企画および実施と教育の国際化を担う「国際高等教育院(ILAS)」による教養・共

は、京都大学の研究者による多彩な授業を、対面またはオンラインから選択して受講できる「講義型」や、研究室等を訪問して先端研究の演習授業を体験する「演習型」を通じて、学習意欲の高い高校生が高度な学術にふれる機会となっています。2024年度は、文系・理系合わせて、講義型10講座、演習型14講座を開講しました。

## 人材も教育研究も、 自由な精神的風土のなかで 多様性を推進

多様で有為の人材が世界中から集うことをビジョンの一つとして掲げる湊総長。研究の多様性やダイバーシティについてこう話します。

「新しい発見は、それがオリジナルであるとともに多様であることが必要です。時代のトレンドだけを追いかけるキャッチアップ型では、なかなか新しい発見や考え方は出てこない。まだ誰も研究していません。大事なと思う領域から始めて、それを独創的な手法で繰り返すことで、やがて世界からも注目を集めることとなります。本学は伝統的にこのようなタイプの研究を継承してきました。がん免疫にしてもiPS細胞にしても、リチウム電池や素粒子にしても全部そうです。このように研究を進めるためには多様性が不可欠で、さらにその原点にあるのが、本学の自由の学風です。自由の学風とは、単に何をしても良いという意味では



ILASセミナーの様子(左、右とも)

